

シャーキャチョクデンによる 『解深密経』の三転法輪解釈

四津谷 孝道

はじめに

チベット仏教は主にインドの大乗仏教の流れを汲むものであり、その両輪をなす中観思想と唯識思想のなかの前者を優位なものとし、さらにその中観思想と密教思想とのさまざまなかたちでの係わり合いをとおして広く展開したものととらえることができる。とりわけ後期伝播時代 (phyi dar) においては、チベット独自のさまざまな仏教思想が登場してきた。そうした状況のなか、大乗仏教の浩瀚な典籍を渉猟することによって得られた知識を背景に、その思想体系に関する詳細な分析をとおして独自の仏教理解を提示した学僧の一人が、サキャ派のセルドク・パンチェン・シャーキャチョクデン (gSer mdog pañ chen Shākya mchog ldan, 1428-1507) である¹。かれはインドにおける大乗仏教の展開に関する広く知られていた理解をあたかも根底から覆すかのような考えを提示しているのであるが²、本稿においては、かれが描いた大乗仏教の体系図の一端を、『解深密経』(Samdhinirmocanasūtra) の三転法輪に関するかれの理解を手掛りとして、明らかにしてみたい。

I

シャーキャチョクデンが心を傾けて批判した人物のひとりが、ゲルク派の開祖であるツォンカパ・ロサンタクパ (Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal, 1357-1419) である。ツォンカパは、かれの重要な著作のひとつである『未了義と了義を峻別する論書・善説心髄』(Dran dang nges pa'i don rnam par phyé ba'i

¹ シャーキャチョクデンの生涯等については、Komarovski [2011] 第 1 章、Caumanns [2015] 参照。

² これについては、Komarovski [2011] の第 2 章から第 4 章、四津谷 [2021] 参照。

bstan bcos legs bshad snying po) において、まず唯識思想を、次に中観思想を取りあげ、アサンガ (Asaṅga, 4 – 5 世紀) を前者の代表的論者と、ナーガールジュナ (Nāgārjuna, 150-250) を後者のそれと位置づけて、かれらとかれらに続く論者たちの著作を典拠として駆使しながら、独自の立場から中観思想の唯識思想に対する優位性を明示している。そして、それと著しく異なった立場に身をおいたのが、シャーキャチョクデンなのである。

シャーキャチョクデンには通称『中観決択』 (*dBu ma rnam par nges pa'i chos kyi dbang mdzod lung dang rigs pa'i rgya mtsho*) という、かれの思想を理解するうえで非常に重要な意味をもつ著作がある。かれはその第一章のなかの「二人の体系 (学系) が矛盾しないで成立する」 (*lugs gnyis mi 'gal bar grub pa*) という表題の下での議論で、次のように述べている。

要約するならば、二人の学匠 (ナーガールジュナとアサンガ) の未了義と了義の相 (特徴) を設定する方法はまさに一致するのである。そして、その具体例に関しても、[以下のように述べられている。] 第一 [法] 輪は未了義であり、そして最後の二つ [の法輪] は了義であると設定することで一致しているのである。³

このように、シャーキャチョクデンによつては、了義 (*nītārtha, nges don*) と未了義 (*neyārtha, drang don*) の設定に関して、ナーガールジュナとアサンガの立場はけっして相対立するものではないとされている。

仏教においては、正統と異端或は教義の優劣を区別する際に、了義と未了義という考え方もちいられる。了義とは、それを説く人の真意が、余すことなく明らかに示されている「究極的な教え」のことである。一方、未了義とは、自らが語ろうとする真意を余すことなく明らかに示す前段階において説かれる「暫定的な教え」或は「仮の教え」のことである。それらはもともとさまざまな教えを説く諸々の經典のなかから、どの經典がブツダの真意を伝えるものであり、或は方便として説かれたものであるかを峻別・刻印するために創出された概念的な装置であったが、後にそれは經典などが正系か傍系かを示すばかり

³ mdor bsdu na/ shing rta'i srol 'byed gnyis kyi drang nges kyi mdo'i mtshan nyid 'jog lugs mthun pa kho na yin cing/ mtshan gzhi* la yang 'khor lo dang po drang don dang/ phyi ma gnyis nges don du 'jog par 'thun no// (BNg.ka.34a7-b1)

* テキストでは “bzhi” となっているが、“gzhi” と読む。

でなく、教義の正統性をも判別する場合や、さらには対象を判断・評価する際にももちいられるようになったと考えられる。そして、その了義と未了義という装置は、たとえば『解深密経』などで述べられている三法輪というもうひとつの装置と連関させて議論されることが多く見られるのである。

シャーキャチョクデンもまさに「了義と未了義」そして「三法輪」という二つの装置をもちいて、大乘仏教の思想体系に関する自説を展開しているのである。上でみたように、シャーキャチョクデンによれば、ナーガールジュナとアサンガはいずれの経典や教義が了義なものであるか或は未了義なものであるかについて理解を共有している、というのであり、より限定していえば、三法輪のいずれが了義であるかという点について同じ見解を有している、というのである。

以下においては、そうしたシャーキャチョクデンの議論をみていくことにしたい。

II

ここでは、まずナーガールジュナが了義というものをどのようにとらえているかについてのシャーキャチョクデンの理解をみてみることにしよう。

かれは、『根本中頌』(*Mūlamadhyamakakārikā*) 第18章の第9偈などを典拠として⁴,

[真実とは、] 語るもの (rjod byed) であることばと分別の対境を超越し、「ある」・「ない」と「～である」・「～でない」などのいずれの極論 (辺) としても思惟されえず、語りえないのであって、勝者 (ブツダ) も [ただ] 言説をとおして増益して述べる以外に、[それ] 自体 (rang gi ngo bo) を有るがままに述べることはできない虚空のような界 (dbyings, dhātu) に対して、「了義」(nges pa'i don), 「勝義諦」(don dam pa'i bden pa), そして「真実」(de kho na nyid) という名称を付して述べた [だけ]

⁴ gzhan las shes min zhi ba dang// spros pa rnam kyis ma spros pa//
nam rtog med don tha dad med// de ni de nyid mtshan nyid do// (MMK.D.tsa.11a3-4)
aparapratyayaṃ śāntaṃ prapañcair aprapañcitam /
nirvikalpam anānārtham etat tattvasya lakṣaṇam // (MMK, de Jong [1977] p.25)

なのである⁵。

というように、本来的にはことばや分別を超えたものこそが了義なのであって、ブツダはそれをあえて「了義」、そして「勝義諦」や「真実」などのようなことばで表現しただけなのである、とシャーキャチョクデンは述べている。

では、そうした了義の教えが三つの法輪のなかのいずれにおいて説かれているとナーガールジュナはとらえているのであろうか。そこで、シャーキャチョクデンが言及するのが、以下の二つの典拠である。

第一に福德でないものが覆される [法] 輪

中間に我が覆される [法] 輪

最後にすべての見解を否定する [法] 輪である⁶。

第一に盛栄（天）の道を説く法輪

中間は解脱（一切知者、nges par legs pa）の共通な道を説く法輪

最後は不住処涅槃を説く法輪 [である]⁷。

⁵ rjod byed kyi sgra dang rnam par rtog pa'i yul las 'das shing yod med dang/ yin min la sogs pa'i mtha' gang du yang bsam pa dang brjod par mi nus la/ rgyal bas kyang tha snyad kyi sgo nas sgro btags nas ston pa ma gtogs rang gi ngo bo ji lta ba bzhin du bstan par mi nus pa'i dbyings nam mkha' lta bu zhiḡ la nges pa'i don dang don dam pa'i bden pa dang/ de kho na nyid ces bya ba'i ming gis btags nas bstan pa yin no// (BNg.ka.5a7-b2)

⁶ dang por bsod nams ma yin pa bzlog pa'i 'khor lo/[] bar du bdag bzlog pa'i 'khor lo/[] mtha' mar lta ba mtha' dag 'gog pa'i 'khor lo/[] (BNg.ka.8a5-6)
これは、アーリヤデーヴァの『四百論』（*Catuhśataka*）の第8章、第15偈の内容を要約したものである。

bsod nams min pa dang por bzlog// bar du bdag bi bzlog pa dang//
phyi nas lta ba kun bzlog pa// gang gis shes de mkhas pa yin// (CS. VIII-15, Lang [1986] p.82)

【訳】「まず福德でないものが排除され、次に我が排除され、その後すべての見が排除される」[ということ] それを知っているのが賢者である。
vāraṇaṃ prāḡ apuṇyaśya madhye vāraṇaṃ ātmanah/
saravaśya vāraṇaṃ paścād yo jānīte sa buddhimān/[] (CS. VIII-15, Lang [1986] p.82)

⁷ dang po mngon par mtho ba'i lam ston pa'i 'khor lo// bar pa nges par legs pa'i lam thun mong ston pa'i 'khor lo/[] tha ma mi gnas pa'i myang 'das ston pa'i 'khor lo/[] (BNg.ka.8a6-7)
これも、直前の場合と同様に、ナーガールジュナの『ラトナーヴァリー』（*Ratnāvalī*）の第1章、第3偈の内容を要約したものである。

dang por mngon par mtho ba'i chos// phyis ni nges par legs 'byung ba//

まず述べておきたいのは、最初に典拠としてもちいられているのが、アーリヤデーヴァ (Āryadeva, 2-3 世紀) のものであり、そしてその次にナーガールジュナ自身のものが挙げられている、ということである。つまり、了義の教えがどの法輪で説かれているかについてのナーガールジュナ自身の考えを論じる重要な議論において、アーリヤデーヴァの著作がその典拠として最初にもちいられているということである。それに加えて、シャーキャチョクデンが同偈をさまざまな多くの重要な議論において典拠として引用していることを顧慮すれば、かれがその偈をいかに重要視していたかを推し量ることができよう。ともかく、これら二つの典拠ではともに何番目の法輪が了義であるかは明示されていないが、第三段階で説かれた教えすなわち第三法輪が究極的なものすなわち了義とされていることは各々の文意から理解できるのである。

さらに、そのようにナーガールジュナにとっては第三法輪が了義であることについては、

そのようであるならば、さきの [すなわち] 直前に説明した真実の究極的なその意味とそれを理解する究極的な見解それは、ナーガールジュナによって他ならぬ最後の [法] 輪 (第三法輪) をとおして提示されたものなのである。何故ならば、究極的な正見とそれの対境を明確に説くという点において、第三 [法] 輪以上に特にすぐれて聖なる他の [法輪] はないからである。それはまた、[以下のようにも] 説明される。第三 [法] 輪であれば、[それは] 必ず究極的了義を説く [法] 輪である。たとえば、[それは] 瑜伽行派のテキストにおいて「最終 [法] 輪は究極的な了義の [法] 輪 [である]」 ('khor lo tha ma nges don mthar thug gi 'khor lo) と説明される [のと同様である]。また、『宝性論』において「最終 [法] 輪が究極的な了義の [法] 輪 [である]」 ('khor lo tha ma kho na nges don mthar thug gi 'khor

gang phyir mngon par mtho thob nas// rim gyis nges par legs pa 'ong// (RV. I-3, Hahn [1982] p.3)

【訳】 まず繁榮する法が [生じ]、その後に至福が生じる。

何故ならば、繁榮することを得て、順次に至福がやって来るからである。

prāg dharmābhyudayo yatra paścān naiḥśreyasodayaḥ//

saṃprāpyābhyudayaṃ yasmād eti naiḥśreyaṣaṃ kramāt// (RV. I-3, Hahn [1982] p.2)

lo) と説明されていることと同様である。[したがって、瑜伽行派のテキストや『宝性論』ばかりでなく、] 無自性論のテキストにおいても「すべての戯論を否定する [法] 輪は最終 [法輪] であると説明するのである」(spros pa thams cad 'gog pa'i 'khor lo tha mar bshad pa yin no) ということは正しいのである⁸。(強調点筆者)

というように、シャーキャチョクデンは、唯識思想や如来蔵思想を有自性論ととらえ、それらのテキストにおけるのと同様に、無自性論のテキストでも最終法輪すなわち第三法輪こそが究極的な了義を説くものであることを根拠として、ナーガールジュナも第三法輪を了義ととらえているとする。そして、その了義は、さきにも言及するように、あらゆる分別を超えていること、すなわち戯論寂滅を内容とするものである、というのである。

そうした「ナーガールジュナにとって第三法輪こそが了義である」ということ、換言すれば「ナーガールジュナは第三法輪を了義の教えを説くものとしてことのほか重視していた」ということは、先の引用において言及されたナーガールジュナとアサンガは第二法輪と第三法輪の両者を了義とする点において立場を同じくするということと抵触するのではないだろうか。

また、以前にツォンカパがアサンガを唯識派の代表的論者ととらえていることにふれたが、その唯識派にとってもっとも重要な聖典のひとつと目されるのが『解深密経』である。というのは、唯識派は、同経に示されている三法輪について、第一法輪は声聞乗の教え、第二法輪は無自性論すなわちナーガールジュナを開祖とする中観派の教えを説くものであって、その両者はともに未了義なものであり、したがって唯識派の教えが説かれている第三法輪のみが了義である、という解釈を施すことによって、自派が中観派に優っていることを主張し

⁸ de ltar na/ gong du bshad ma thag pa'i/ gnas lugs kyi don mthar thug pa de dang/ de rtogs pa'i mthar thug gi lta ba de/ klu sgrub zhabs kyis 'khor lo tha ma nyid las phyung ba yin te/ mthar thug gi lta ba dang de'i yul gsal bar ston pa la chos kyi 'khor lo gsum pa'i gong na khyad par du 'phags pa gzhan yod pa ma yin pa'i phyir ro// de yang 'di ltar / gang 'khor gsum pa yin na/ nges don mthar thug ston pa'i 'khor lo yin pas khyab/ dper na/ rnal 'byor spyod pa'i gzhung las 'khor lo tha ma nges don mthar thug gi 'khor lor bshad pa dang/ *Theg pa chen po rgyud bla mar!* 'khor lo tha ma kho na nges don mthar thug gi 'khor lor bshad pa bzhin/ ngo bo nyid med par smra ba'i gzhung las kyang/ spros pa thams cad 'gog pa'i 'khor lo tha mar bshad pa yin no zhes bya ba ni rigs pa'o// (BNG. ka.8b2-5)

うからである。そうしたなか、シャーキャチョクデンがとらえているように、ナーガールジュナにとって第三法輪こそが了義であることは、『解深密経』も第三法輪を了義としていることより、その限りにおいて両者の間に齟齬はない。だが、同経における第三法輪においては唯識派の教えが説かれており、また第二法輪においては中観派の教えが説かれていると理解されたならば、そこにおいてはいささか問題が生じることとなる。⁹

まず、ナーガールジュナが第三法輪を了義とすることを前提にして、第三法輪ではかれが本來說くべき中観派の教えではなく唯識派の教えが説かれているとなれば、かれはたとえば唯識派が説く三性説を了義ととらえるのであろうか。それについてシャーキャチョクデンは、

〔対論者：〕それならば、『解深密経』における最終法輪において説明されたことそれを、ナーガールジュナが了義とどのように解説するのか。

〔シャーキャチョクデン：その『解深密経』の最終法輪は、〕無自性論者（中観派）が自身の立場の三相（三性）の設定を区別して説く了義である。その立場（lugs）のその三つの設定も、『入中論』（*Madhyamakāvātāra*）の註釈において、

縁起し、映像のようなものが依他起性であり、またそれを自性〔を有するもの〕と増益されたものが遍計所執性であり、またそれが自性に関して空であるものが円成実性〔である〕。

このように説明しているように認めるべきである¹⁰。

⁹ たとえば、プトウン（*Bu ston Rin chen grub*, 1290-1364）は、『プトウン仏教史』（*Bu ston Chos 'byung*）のなかの『解深密経』の三転法輪に言及している箇所において、中観派は第二法輪を了義とするという説にふれているが、そうした理解は中観派が第二法輪に自らの学説の典拠となる教説が属するととらえているからであると考えられる。

dBu ma pa rnam bka' dang po dang mtha' gnyis dgongs pa can/ bar pa rnam nges don du 'dod do// (ya.72a4)

【訳】中観派の人々は第一の御ことば（第一法輪）と最後〔の転法輪〕（第三法輪）の二つは意図を有するもの〔すなわち未了義〕で、諸々の中間のもの（第二法輪）は了義と認めるのである。

¹⁰ 'o na/ dGongs 'grel las 'khor lo tha mar bshad pa de/ Klu sgrub zhabs kyis nges pa'i don du ji ltar 'grel zhe na / ngo bo nyid med par smra ba rang lugs kyi mtshan nyid gsum gyi rnam par bzhag pa so sor phye nas ston pa'i nges pa'i don no// de'i lugs kyi de gsum gyi rnam par bzhag pa yang/ 'Jug

と述べている。つまり、『解深密経』において了義とされる第三法輪の三性説はナーガールジュナに連なるすなわち中観派のチャンドラキールティの、したがって教説の内容からみれば第二法輪に属すると考えられる『入中論』にある三性説のように理解されるべきである、というのである。そして、それを根拠として「ナーガールジュナが『解深密経』の第三法輪を了義とすることに不都合はない」というのであれば、そこにおいては第二法輪も了義であることが含意されていることとなる。ところが、こんどはシャーキャチョクデンの「ナーガールジュナがそうした第二法輪と第三法輪を共に了義とする」というそうした理解は、さきの「ナーガールジュナにとって第三法輪こそが了義である」、つまり「ナーガールジュナは第三法輪を了義の教えを説くものとしてことのほか重視していた」ということとかれの理解とどう整合性をもたせるのであろうか。そして、それは「第二法輪は未了義である」とする『解深密経』の記述と齟齬をきたすこととなる。

以上のように、シャーキャチョクデンが提示する「ナーガールジュナにとって第三法輪こそが了義である」並びに「ナーガールジュナとアサンガという両学匠の学説体系がけっして矛盾対立するものではない」という重要な主張に絡む問題が浮上してくるのである。

III

前節の末尾で言及した問題にシャーキャチョクデンがどのように対応しうるかを明らかにするに先立ち、それを解釈するにあたって重要な役割を果たす了義並びに未了義というものをかれがどのようにとらえているかについて説明を加えておくことにしよう。

シャーキャチョクデンが了義並びに未了義というものをどのようにとらえているかを理解するためにおさえておくべき重要なことは、かれが“brjod bya”と“bstan bya”という二つの用語を明確に区別して用いているということである。

'grel las/ rten 'brel gzugs brnyan lta bu gzhan dbang dang/ de la rang bzhin du sgro btags pa kun btags dang/ de rang bzhin gyis stong pa yongs grub tu bshad pa ltar khas len dgos pa yin no// (BNg.ka.8b5-7)

なお、引用文中の『入中論』の三性説に関する言及は、同書における三性説の説明箇所(MA. La Vallée Poussin [1970b] pp.199-204)を要約したものと考えられる。

それらについては、以下のような説明が加えられている。

その説き方 (ston tshul) は二つである。つまり「説かれるべき (bstan bya) 意味を主に説くもの」(bstan bya'i don gyi gtso bor ston pa)と「語られるべき (brjod bya) 意味を主に説くもの」(brjod bya'i don gyi gtso bor ston pa) である。

[対論者:] これ [ら] 二つの特徴は何か。

[シャーキャチョクデン:] 「説かれるべき主なもの」(bstan bya'i gtso bo) とは、「主張しようとする事 (zhe 'dod) の主な部分」を意味する。[一方] 「語られるべきもの」(brjod bya) とは、「実際の [語られるべきもの]」(dngos [kyi brjod bya]) と想定される (zhen pa) 「語られるべきもの」(zhen pa'i brjod bya) のいずれかに他ならない¹¹。

この記述だけからそれらの用語の意味を正確につかむことは難しいが、概ね “bstan bya” 「説かれるべきもの」とは「話者が本当に説こうとするもの」すなわち「説こうとするテーマ」であり、“brjod bya” 「語られるべきもの」とは「実際に示されている文言」のことであると考えられる。

シャーキャチョクデンは、それら二つの用語をより明確に理解するために、「語られるべきもの」であっても「説かれるべきもの」ではないもの、つまり叙述されたものが、話者の説こうとしているテーマではないものの例を提示している。

そのようなならば、「語られるべきもの」(brjod bya) であって「説かれるべきものでないもの」(bstan bya ma yin pa) は、[たとえば] 「我があること」(bdag yod pa) それは「我がない」(bdag med do) という経典にまつわる (zhen pa) 「語られるべきもの」[すなわち実際に説かれている文言] と設定されるべきもののようなものである¹²。

¹¹ ston tshul la gnyis te / bstan bya'i don gyi gtso bor ston pa dang/ brjod bya'i don gyi gtso bor ston pa'o// 'di gnyis kyi mi 'dra ba'i khyad par ci zhe na/ bstan bya'i gtso bo ni zhe 'dod kyi gtso bo la bya la/ brjod bya ni dngos dang zhen pa'i brjod bya gang rung kho na'o// (BNg.ka.15b7-16a1)

¹² de ltar na brjod bya yin la bstan bya ma yin pa ni/ bdag yod pa de bdag med* do zhes pa'i mdo'i zhen pa'i brjod byar bzhas dgos pa lta bu'o// (BNg.ka.16a1-2)

* テキストでは “yod” となっているが、“med” と読む。

つまり、「我（アートマン）がある」と実際に説かれている文言は話者が何らかの目的をもって語ったものであって、話者が真に説こうとしたテーマは、たとえば「我はない」ということであると想定されるのである。

次に、シャーキャチョクデンは、『根本中頌』第24章の第8偈の一部である、
諸々の仏が〔教法を〕説くことは
二諦に正しく依るのである。¹³

を典拠として、未了義と了義の分類の基準は、二諦すなわち言説諦（世俗諦）と勝義諦であるとしたうえで、言説諦を内容とするものを未了義の聖典とし、それについては、

「未了義を有する聖典」（drang ba'i don can gi gsung rab）の定義は、[以下のようなものである。それは、] 教化されるべき所化の人々すなわち暫定的〔な教え〕である世俗諦が主に説かれるべきである所化の人々に対して特定なテーマ（bstan bya）、まさに世俗諦〔という〕暫定的なテーマ（gnas skabs kyi bstan bya）を主に説く聖典（gsung rab）である¹⁴。

と述べられている。つまり、世俗諦（言説諦）が説かれるべき所化の人々に対して世俗諦という暫定的なテーマとして主に扱われているものが未了義の聖典なのである。一方、了義を有する聖典については、

「了義を有する聖典」の定義は、[以下のようなものである。それは]、特別な（限定された）所化つまり勝義諦を説くことに相応しい（skabs su bab pa）所化に対して特定なテーマ（bstan bya）すなわちまさに「暫定的な勝義」と「究極的な〔勝義〕」（don dam pa nyid gnas skabs dang mthar thug）というテーマ（bstan bya）を主にして説く聖典である¹⁵。

¹³ dve satye samupāsṛitya buddhānām dharmadeśanā /
lokasamvṛtisatyam ca satyam ca paramārthataḥ // (MMK. de Jong [1977] , p.34; D. / BNg. ka.16a1) (下線部が該当箇所)

¹⁴ drang ba'i don can gi gsung rab kyi mtshan nyid ni/ gdul bya'i khyad par gnas skabs kun rdzob kyi bden pa gtso bor ston dgos pa'i gdul bya la bstan bya'i khyad par kun rdzob kyi bden pa nyid gnas skabs kyi bstan bya'i gtso bor bstan pa'i gsung rab bo// (BNg.ka.15b1-2)

¹⁵ nges pa'i don can gyi gsung rab kyi mtshan nyid ni/ gdul bya'i khyad par don dam pa'i bden pa ston pa skabs su bab pa'i gdul bya la bstan bya'i khyad par don dam pa nyid gnas skabs dang mthar thug gi bstan bya'i gtso bor byas nas ston pa'i gsung rab'o // (BNg.ka.15b2-3)

と述べられている。ここで留意すべきなのは、勝義（勝義諦）には暫定的なものと究極的なものが設定されているが、いずれの勝義がテーマとされて説かれていても、それは了義を有する聖典である、とみなされているということである。¹⁶

シャーキャチョクデンは、上記のように定義した未了義を有する聖典と了義を有するそれをさらに細かく分けて、

それ [ら]（未了義の聖典と了義の聖典）各々にも二つのものが [ある]。つまり、「ことばどおりのもの」（sgra ji bzhin pa）と「[ことば] どおりではないもの」（[sgra] ji bzhin pa ma yin pa）である。[さらに、] 後のその [二つの] 各々（phyi ma de re re）（「未了義でことばどおりでないもの」と「了義でことばどおりでないもの」）にも二つのもの [がある]。つまり、「密意を有するもの」（dgongs pa can）と「密意を有しないもの」（dgongs pa can ma yin pa） [である] ¹⁷。

というように説明している。

まず、未了義を有する聖典とは、さきにふれたように、世俗諦が説かれているものなのであるが、それにはことばどおりにとらえられるべきものとそうでないものがあり、後者にはさらに何らかの意図（密意）があってそのように説かれたものと、そうではなくて、ただことばどおりにとらえられるべきではないものがあるというのである。そして、それと同様なことは、了義を有する聖典についても言われる。どのようなかたちであれ勝義諦が説かれているものは了義の聖典なので、それにもことばどおりにとらえられるべきものとそうでないものがあり、また後者には何らかの意図があってそのように説かれたものと、そうではなくてただことばどおりにとらえてはならないものがあるというのである。

そして、シャーキャチョクデンは、世俗諦が説かれているものであって、ことばどおりにとらえられるべきものを「未了義のなかの了義」、同じく世俗諦が説かれているものであってもことばどおりにとらえられるべきではないものを「未了義

¹⁶ チャンドラキールティは、『ブラサンナパダー』 *Prasannapadā* で、『三昧王経』 *Samādhirājasūtra* と『無尽慧経』 *Akṣamatīnirdeśasūtra* を典拠にして、このように勝義諦を扱うものが了義経であり、一方世俗諦を扱うものが未了義経であることを述べている。（PPMV, La Vallée Poussin [1970a] pp.43-44）

¹⁷ de re re la'ang gnyis gnyis te/ sgra ji bzhin pa dang / ji bzhin pa ma yin pa'o// phyi ma de re re la yang gnyis gnyis te/ dgongs pa pa can dang / dgongs pa can ma yin pa'o// (BNg.ka.15b3-4)

のなかの未了義」とし、さらに勝義諦が説かれているものであって、ことばどおりにとらえられるべきものを「了義のなかの了義」、勝義諦が説かれているものであってもことばどおりにとらえられるべきではないものを「了義のなかの未了義」とするのである¹⁸。要するに、世俗諦をテーマとする未了義を有する聖典には、ことばどおりにとられるべきか否かによってさらに了義的なものと未了義的なものがあり、また勝義諦をテーマとする了義を有する聖典にも、ことばどおりにとらえられるべきか否かによってさらに了義的なものと未了義的なものがある、ということなのである。¹⁹

未了義 (世俗諦をテーマとするもの) 1. ことばどおりなもの (未了義のなかの未了義) 2. ことばどおりでないもの (未了義のなかの未了義) 2-1. ことばどおりでなくて、密意を有するもの 2-2. ことばどおりでなくて、密意を有しないもの
了義 (暫定的或は究極的な勝義諦をテーマとするもの) 3. ことばどおりなもの (了義のなかの了義) 4. ことばどおりでないもの (了義のなかの未了義) 4-1. ことばどおりでなくて、密意を有するもの 4-2. ことばどおりでなくて、密意を有しないもの

¹⁸ de ltar drang nges gnyis la/ sgra ji bhzin pa yin min sogs bzhi bzhi phyé ba de bzhin du/ gzhan bzhi po la'ang drang nges sogs bzhi bzhi 'byed dgos pa shes par byas nas 'di ltar bshad par bya ste/ brjod byed gsung rab la drang don gyi drang don dang/ drang don gyi nges don gnyis dang/ yang/ nges don gyi drang don dang/ nges don gyi nges don gnyis te bzhi'o// (BNg.kha.16a5-6)

【訳】 そのように、未了義と了義の二つに関して、「ことばどおりである」か否か等四つずつ [に] 分類されたのと同様に、他の四つ (gzhan bzhi po) (?) に関しても未了義と了義等を四つずつ [に] 分類すべきことが理解されたうえで、以下のように説明されるべきである。つまり、「語るもの」(brjod byed) である聖典 (gsung rab) に関しては、「未了義のなかの未了義」(drang don gyi drang don) と「未了義のなかの了義」(drang don gyi nge don) の二つと、また「了義のなかの未了義」(nges don gyi drang don) と「了義のなかの了義」(nges don gyi nges don) の二つで、[合わせて] 四つである。

¹⁹ シャーキャチョクデンは、了義と未了義の設定について、世俗諦を主にテーマとするもの或は勝義諦を主にテーマとするものという基準の他に、ことばどおりに認められるべきか否かという基準を組みあわせている。だが、ツォンカパは、世俗諦或は勝義諦を主にテーマとするというのは、あくまで中観派が了義か未了義かを設定する基準であり、ことばどおりに認められるべきか否かというのは唯識派がそれらを設定する基準であるととらえている。そして、そうしたツォンカパの理解は、『中観決択』でシャーキャチョクデンによって批判の対象とされている。(BNg. kha.9a4-15a3)

IV

いささか回り道をしたので、さきに言及した論点をもう一度整理し確認しておくことにしよう。

まず、本稿に関わる『解深密経』の議論の内容はさきにも短く言及したが、ここでは幾分詳しく説明しておくことにしよう。『解深密経』は唯識派にとってことのほか重要な所依の經典である。その理由のひとつとして、同経にある三法輪説をとおして「唯識派の学説は大乘仏教において並び立つ無自性論者すなわち中観派の学説に勝る教えである」と主張されうることがあげられる。その説くところによれば、第一法輪は声聞乗の人々に対して説かれたもので四聖諦を内容とし、未了義な教えである。第二法輪は、大乘の人々に説かれたもので、諸法が無自性であり、生じることもなく、滅することもなく、本来寂靜なものであり、自性涅槃であることが説かれているものであり、なかでも重要なのは諸法が無自性であることをその内容とし、それは未了義な教えである、ということである。一方、第三法輪は、一切乗すなわち声聞乗並びに大乘の人々に説かれたもので、その内容は、第二法輪と同様に、諸法が無自性であり、生じることもなく、滅することもなく、本来寂靜なものであり、自性涅槃であることを説くものであるが、それだけでなく、諸々の事物の有の側面と無の側面を明確に説き分けたものであることが付記されている。そして、同法輪はその点において前の二つの法輪—とりわけ第二法輪—と区別されて、了義な教えと定められている²⁰。

『解深密経』における三法輪の理解

	説かれる対象(所化)	教えの内容	了義/未了義
第一法輪	声聞乗（小乗）	四諦説	未了義
第二法輪	大乘	諸法が無自性であること、不生・不滅であること、本来寂靜であること、自性涅槃であること	未了義
第三法輪	一切乗	諸法が無自性であること、不生・不滅であること、本来寂靜であること、自性涅槃であること、ただし諸法の有と無を峻別するもの	了義

²⁰ SN, Lamotte [1935] p.85.

唯識派は、そのように設えられた『解深密経』の三法輪の議論において、中観派の所依の經典やその教説を未了義とされる第二法輪に配当し、自派の所依の經典やその教説を了義とされる第三法輪に配当することによって、唯識派の教えが中観派のそれよりも優れたものであることを示そうとするのである。

そうしたなか、シャーキャチョクデンは二つの問題に直面するであろうことが想定される。まず第一に、シャーキャチョクデンの「ナーガールジュナにとっては第二法輪と第三法輪がともに了義である」という理解については、「ナーガールジュナにとって第三法輪こそが了義である」というかれのもうひとつの理解との整合性が問題となる。第二に、その第二法輪をも了義とする理解は、「第二法輪は未了義である」とする『解深密経』の記述と齟齬することとなる。

では、シャーキャチョクデンはそうした二つの問題をどのように解決できるであろうか。

まず、第一法輪は当該の問題とは直接関係するものではないが、シャーキャチョクデンはその説明において重要なことを述べているので、まずさきにそれについて簡単にみておくことにしよう。シャーキャチョクデンは、第一法輪の内容を次のように簡潔に説明している。

要約するならば、この〔法〕輪（第一法輪）は世俗諦を主に説くものである点からは未了義〔であり、〕また「〔その〕上が有る」と云われるのであり、「ことばどおりでない多くのことが説き示されている」という点からは「〔対論者が批判する〕余地があるもの」〔であり、〕また「論争の基体（対象）となる」と〔も〕云われるのである²¹。

『解深密経』においては、転じられた法輪は、1) それより上のものすなわち優れた教えがあるか否か、2) 了義であるか或は未了義であるか、3) 対論者が批判する余地があるか否か、4) 論議の対象であるか否か、という四つの点が一括りに問題とされていると考えられる。だが、ここにおいては、第一法輪は世俗諦を主に説いていることにもとづいて、それより優れた教えがあるとされ、そして未了義である、というように、まず最初の二点のみが取り上げられてい

²¹ mdor na 'khor lo 'dis kun rdzob bden pa gtso bor ston pa'i cha nas drang ba'i don dang bla na mchis pa zhes bya la/ sgra ji bzhin pa ma yin pa mang po bshad pa'i cha nas skabs mchis pa dang/ rtsod pa'i gzhir gyur ba zhes bya'o// (BNg.ka.18a7-b1)

る。その一方で、ことばどおりに理解されるべきではないことにもとづいて、同法輪は対論者が批判する余地があるものであり、論争の対象となる、というように、残りの2点が別に取り上げられている。なお、翻っていえば、第一法輪が世俗諦を主に説いていることよりそれより優れた教えがあり未了義であるということは、言うまでもなく勝義諦を主に説く教説が了義であることを含意するものである。

シャーキャチョクデンは、さらに続けて、

第一の御ことば（第一法輪）である四諦の[法]法輪は未了義を有するものである。何故ならば、[第一法輪は]世俗諦が説かれるべき種姓を有する所化の人々に対して、まさにそれ（世俗諦である四諦説）をテーマ（*bstan bya*）の中心として説いている[法]法輪であるからである。まさにその根拠によって、この[転法]法輪に関しては、[未了義であるだけでなく、][[その]上が有ること]（*bla na mchis pa*）、「余地が有ること」（*skabs mchis pa*）、そして「論争の基体（対象）となること」（*rtsod pa' i gzhir gyur pa*）云々とも云われているのである²²。

と述べている。さきの引用とは異なって、第一法輪は世俗諦、具体的には四諦を主なテーマ（*bstan bya*）とするものであることによって、未了義であり、それより優れた教えが存在することだけでなく、対論者が批判する余地があり、論争の対象となるとされており、シャーキャチョクデンの理解にいささかの混乱がみられる。それはともかく、とくにそのなかの未了義であることについては、

この[法]法輪（第一法輪）は、おしなべては未了義であるけれども、その中に含まれているもの（*nang tshan*）で了義を有するもの（未了義のなかの了義の教え）がないもので[も]ないのである。何故ならば、人無我を説く諸々の経典は了義を有すると認めるべきであるからである²³。

²² *bka' dang po bden pa bzhi'i chos 'khor ni drang ba'i don can yin te/ gdul bya kun rdzob kyi bden pa gtso bor ston dgos pa'i rigs can la/ de nyid bstan bya'i gtso bor ston pa'i 'khor lo yin pa'i phyir/ rgyu mtshan de nyid kyi na 'khor lo 'di la/ bla na mchis pa dang/ skabs mchis pa dang/ rtsod pa' i gzhir gyur pa zhes kyang bya'o// (BNg.ka.18a1-2)*

²³ *'khor lo 'di'i spyi ldog nas drang pa'i don can yin kyang/ de'i nang tshan du gyur pa'i nges pa'i don*

と述べられている。つまり、第一法輪には四諦説をはじめとして種々な教えがあり、総じていえばそれらは確かに未了義と理解されるものであるが、たとえば人無我のような了義の教説もそのなかに含まれているということなのである。そうした教説は、先に言及したシャーキャチョクデンによる了義と未了義に関する分類のなかの「未了義のなかの了義」とされるような教説であると考えられる。²⁴ ここで留意すべきことは、『解深密経』の第一法輪は未了義ではあっても、そのなかには了義的な要素を含む教説もあるというように、シャーキャチョクデンが第一法輪の未了義であることへの理解に幅をもたせていることである。

シャーキャチョクデンによる第一法輪についてのそうした理解は、第二法輪並びに第三法輪に敷衍されていくのである。

また、「後の二つの〔法〕輪は了義を有する」(‘khor lo phyi ma gnyis ni nges pa'i don can)といわれるのである。何故ならば、[後の二つの法輪は] 教化されるべき所化の人々である大乘という種姓を有する人々に対して [説かれる] テーマ (bstan bya) の主なものである勝義諦のみを説く [法] 輪であるからである。これには二つ [ある]。すなわち [1] 「了義のなかの未了義を説明する [法] 輪」(nges don gyi drang don 'chad pa'i 'khor lo) と [2] 「了義のなかの了義であることそのものを説明する [法] 輪」 [である] ²⁵。

ここで了義を有するとする後の二つの法輪とされるのは、もちろん第二法輪並びに第三法輪のことであり、それらは共に大乘の種姓を有する人々に対する

can med pa ni ma yin te/ gang zag gi bdag med par ston pa'i mdo rnam nges pa'i don can du khas len dgos pa'i phyir/ (BNg.ka.18a3-4)

²⁴ シャーキャチョクデンの了義と未了義に関する分類との関連のなかで、第一法輪の四諦説と人無我の教えは以下のようにとらえられるであろう。前者は「未了義のなかの未了義」、すなわち世俗諦を主にテーマとするものである、ことばどおりにとらえられるべきものではないものである。一方、後者は「未了義のなかの了義」であり、これは世俗諦を主にテーマとするものであって、ことばどおりにとらえられるべきものなのである。

²⁵ yang 'khor lo phyi ma gnyis ni nges pa'i don can zhes bya ste/ ched du bya ba'i gdul bya theg pa chen po'i rigs can la/ bstan bya'i gtso bo don dam pa'i bden pa kho na gtso bor ston pa'i 'khor lo yin pa'i phyir/ 'di la gnyis te/ nges don gyi drang don 'chad pa'i 'khor lo dang/ nges don gyi'ang nges don nyid 'chad pa'i 'khor lo'o// (BNg.ka.18b1-2)

ものであり、勝義諦をテーマとしたものであるが、そのなかのひとつは「了義のなかの未了義」を、もう一方は「了義のなかの了義」を説くものとされている。そして前者は第二法輪であり²⁶、それについては、

この第二 [法] 輪は、語るもの (brjod byed) の観点からは「未了義を説明する [法] 輪である」(drang ba'i don can) と云われるものである。何故ならば、自らが説明すべきものである意味内容まさにそれをことばどおりでないという観点より説明する [法] 輪であるからである²⁷。

このように述べられている。つまり、第二法輪は、勝義をテーマとするものではあってもことばどおりにとらえられるべきではない教え、つまり「了義のなかの未了義」を説くものである、というのである。

次に、もうひとつの了義を説くとされる第三法輪については、以下のように述べられている。

そして次は、最終 [法] 輪 (第三法輪) である、正確に峻別された [法] 輪は、究極の了義 (nges don mthar thug pa) である。何故ならば、所化の人の状態である、つまり了義の器となるものに対して、究極的な了義まさにそれをことばどおりの点から説く [法] 輪であるからである。それ故に、「無上のもの [であり]、[対論者が批判する] 余地のないもの [であり]、論難 (論争) の対象とならないもの [である]」と云うのである²⁸。

第三法輪は「了義のなかの了義」の教説と考えられる。というのは、ここにあるように、同法輪は勝義諦それも究極の勝義諦をテーマとするものでありか

²⁶ dang po ni/ nges don sgra ji bzhin pa ma yin pa'i sgo nas 'chad pa'i 'khor lo ste/ 'khor lo gnyis pa'o// (BNg.ka.18b2)

【訳】第一のもの(了義の [なかの] 未了義を説明する [法] 輪)は、了義をことばどおりでない方法で説明する [法] 輪 (nges don sgra ji bzhin pa ma yin pa'i sgo nas 'chad pa'i 'khor lo) であり、第二 [法] 輪である。

²⁷ 'khor lo gnyis pa 'di chos can/ rjod byed kyi sgo nas drang ba'i don can zhes bya ste/ rang gi bstan bya'i don de nyid sgra ji bzhin pa ma yin pa'i sgo nas 'chad pa'i 'khor lo yin pa'i phyir/ (BNg. ka.18b2-3)

²⁸ da ni 'khor lo tha ma/ legs par rnam par phye ba'i 'khor lo chos can/ nges don mthar thug pa yin te/ gdul bya gnas nges don gyi snod du gyur pa la/ nges don mthar thug pa de nyid sgra ji bzhin pa'i sgo nas ston pa'i 'khor lo yin pa'i phyir/ de'i phyir/ bla na ma mchis pa dang/ skabs ma machis pa dang/ rtsod pa'i gnas su ma gyur pa zhes bya'o// (BNg.ka.19b1-2)

つことばどおりにとらえられるべきものであるからである²⁹。また第三法輪は、そのように「了義のなかの了義」であることより、「了義のなかの未了義」である第二法輪と異なり、無上のものであり、対論者が批判する余地のないものであり、論争の対象とならないものである、というのである。

以上のように、シャーキャチョクデンが『解深密経』の三法輪をどのようにとらえているかをみてきた。繰り返せば、第一法輪は、大別すると未了義の教えなのであるが、そのなかには未了義なものではあっても了義的なもの（未了義のなかの了義）と未了義なもの（未了義のなかの未了義）があるとされている。また、第二法輪と第三法輪の両者は了義とされるが、前者は了義の未了義、後者は了義の了義である、ととらえられているのである。

では、シャーキャチョクデンのこうした三法輪に関する理解によっては、さきに掲げた問題はどのように解決されることになるであろうか。

まず、「ナーガールジュナは、アサンガと同様に、第二法輪と第三法輪とともに了義であるととらえている」というかれの理解と、「ナーガールジュナにとって第三法輪こそが了義である」というもうひとつのかれの理解との整合性についてであるが、それは以下のように説明されよう。シャーキャチョクデンにおいては、第二法輪は「了義のなかの未了義」、第三法輪は「了義のなかの了義」とされるのであるが、かれが「ナーガールジュナが第二法輪と第三法輪の両者を了義とする」というのは、前者の「了義のなかの未了義」そして後者の「了義のなかの了義」のそれぞれ前半部分の了義をさして語られたものである、と考えられる。一方、「ナーガールジュナにとって第三法輪こそが了義である」、換言すれば「ナーガールジュナは第三法輪を了義の教えを説くものとしてことのほか重視している」というのは、第三法輪が「了義のなかの了義」とされていることに関わるものである。つまり、ナーガールジュナは第三法輪ばかりでなく第二法輪も了義とみなしてはいるが、かれにとって第二法輪はあくまで暫定的な了義（了義のなかの未了義）でしかなく、「了義のなかの了義」とされる第三法輪こそが究極的な了義である、というように理解されるのであ

²⁹ gnyis pa tha mar spros pa thams cad bzlog pa'i khor lo chos can/ nges don gyi nges pa'i don can yin te/ nges don de nyid sgra ji bzhin pa'i sgo nas ston pa'i mdo yin pa'i phyir/ (BNg.ka.33b2-3)

【訳】 [それら(第二法輪・第三法輪)の中の] 第二のものすなわち最後に戲論すべてが覆される [第三法] 法輪は、了義のなかの了義である。何故ならば、まさにその了義は「ことばどおり」という観点から説く經典であるからである。

る。

次に、「ナーガールジュナは第三法輪ばかりでなく第二法輪をも了義とする」というシャーキャチョクデンの理解は、「第二法輪は未了義である」とする『解深密経』の記述と齟齬するものである、という問題については、以下のように説明されよう。ナーガールジュナが中観論者として『解深密経』の第二法輪を了義ととらえているというのは、第二法輪の「了義のなかの未了義」の前半部分の「了義」と関連づけて語られたものである。一方『解深密経』において第二法輪が未了義ととらえられているというのは、第二法輪の「了義のなかの未了義」の後半部分の「未了義」をさすものであると理解され、上述のような齟齬がないとみなされるのである。

VII

最後に、本稿で扱ったシャーキャチョクデンが直面するであろうと想定された二つの問題の背景についてふれておきたい。

シャーキャチョクデンの大乗仏教の思想体系の理解は、まずチベット仏教の特徴である中観思想を至上のものとするということが大前提とする。しかし、そうでありながらも、かれはインド・チベットの大乗仏教の流れのなかでは中観思想より下位に位置づけられる傾向にあった唯識思想を復権させ、従来の中観思想と同等にとらえようとするのである。そして、かれのそうした試みは、たとえば「ナーガールジュナとアサンガの立場はけっして相対立するものではない」、具体的には「二人の学匠は『解深密経』の第二法輪と第三法輪を了義であるとみなすことにおいては軌を一にする」という理解のなかにみることができるのである。だが、かれはそれにとどまらず、形相虚偽論的な唯識思想を、中観自立派並びに中観帰謬派によって代表される従来の中観思想より優れたものにとらえ、それを「大中観」(dBu ma chen po) ととらえていくのである。そのことは、ナーガールジュナは第二法輪と第三法輪を了義であるとするが、ナーガールジュナの真意は第三法輪をことのほか重要視し、それを究極の了義すなわち了義のなかの了義とする、というシャーキャチョクデンの理解に見出すことができるのである。だがその一方で、上記のように「ナーガールジュナは第三法輪ばかりでなく第二法輪をも了義とする」ととらえるシャーキャチョクデンは、三法輪説を説く『解深密経』自体において「第二法輪は未了義である」と示されていることとの齟齬をどうしても解消しなければならない

立場に置かれることとなる。それに対して、シャーキャチョクデンはどう対処しようであろうか。そこで着目されるのが、シャーキャチョクデンが第二法輪を「了義のなかの未了義」であると定義づけていることである。つまり、ナーガールジュナが第二法輪を了義とするその了義はその定義の前半部の了義（下線部分）であり、『解深密経』が第二法輪は未了義であるとする未了義はその定義の後半部の未了義（波線部分）であることとらえることによって、シャーキャチョクデンはさきの齟齬・矛盾は解消しようと考えられるのである。

そして、こうしたシャーキャチョクデンの試みは、かれの大乗仏教の思想に関する体系図からみれば、チベット仏教における「中観思想を至上のものとする」という前提の下、自性空という考え方を基本とした従来の中観思想を換骨奪胎して、唯識思想にとどまらず、如来蔵思想そして密教的な要素を備えた他空的な中観思想を構築する営みの一端或はそれをめざす一つの前段階としてとらえられるべきものなのである。

【略号表】

BNg	<i>Theg pa chen po dbu ma rnam par nges pa'i chos kyi bang mdzod lung dang rigs pa'i rgya mtsho.</i>
CS	<i>Catuhśataka.</i>
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka.
MA	<i>Madhyamakāvātārabhāṣya.</i>
MMK	<i>Mūlamadhyamakakārikā.</i>
PPMV	<i>Prasannapadāmūlamadhyamakakārikāvṛtti.</i>
RV	<i>Ratnāvalī.</i>
SN	<i>Samdhinirmocanasūtra.</i>

【使用文献】

- Bu ston Chos 'byung: The collected works of Bu-ston*, edited by Lokesh Chandra (Śata-piṭaka series, Indo-Asian literatures) vol. 64.
- Catuhśataka*, Lang [1986] .
- Madhyamakāvātāra*, La Vallée Poussin [1970b] .
- Mūlamadhyamakakārikā*, Skt. De Jong [1977] , Tib. D (dBu ma) , vol.1.
- Prasannapadāmūlamadhyamakakārikāvṛtti*, Skt. La Vallée Poussin [1970a] , Tib. D (dBu ma) ,

vol.7.

Ratnāvalī, Hahn [1982] .

Theg pa chen po dbu ma rnam par nges pa'i chos kyi bang mdzod lung dang rigs pa'i rgya mtsho.

The Collected Works of gSer mdog pañ chen Śākya mchog ldan, 24 vols. Thimphu; Kunzang Tobgey, 1975, vol. 14, pp. 341–647.

【参考文献】

Caumanns, Volker.

2015: *Sākya-mchog-ltan, Mahāpaṇḍita des Klosters gSer-mdog-can; Leben und Werk nach den tibetischen Quellen*, Contributions to Tibetan Studies 11. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.

de Jong, Jan W.

1977. *Mūlamadhyamakakārikā*, Adyar Library Series 109, Adyar Library and Research Centre. Hahn, Michael.

1982: *Nāgārjuna's Ratnāvalī, Indica et Tibetica (Band I)* , *Monographien zu den Sprachen und Literaturen des indo-tibetischen Kulturraums*, Indica et Tibetica Verlag.

袴谷憲昭

1994 『唯識の解釈学『解深密経』を読む』, 春秋社.

梶山雄一 / 瓜生津 隆真

1980 『大乘仏典 14 龍樹論集』, 中央公論社.

片野 雄 / ツルティム・ケサン

1998 『インド唯識思想の研究』, 文栄堂.

1998 『ツォンカバ 中観哲学の研究 II 『レクシェーニンポ』—中観章—和訳』, 文栄堂.

Komarovski, Yaroslav

2011: *Visions of Unity The Golden Paṇḍita Shākya Chokden's New Interpretation of Yogācāra and Madhyamaka*, State University of New York Press.

Lamotte, Étienne

1935: *Samdhinirmocana Sūtra: L'Explication des Mystères*, Louvain / Paris.

Lang, Karen

1986 *Āryadeva's Catuḥśataka: On the Bodhisattva's Cultivation of Merit and Knowledge*, Indiske Studier VII, Akademisk Forlag.

La Vallée Poussin, Louis de.

- (66) シャーキャチョクデンによる『解深密経』の三転法輪解釈 (四津谷)
- 1970a *Mūlamadhyamakakārikā de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti. (Bibliotheca Buddhica, 4) Reprint, Biblio Verlag.*
- 1970b *Madhyamakāvātāra par Candrakīrti. (Bibliotheca Buddhica, 9) Reprint, Biblio Verlag.*
Thurman, Robert A.F.
- 1984 *Tsong khapa's Speech of Gold in the Essence of true Eloquence: reason and enlightenment in the central philosophy of Tibet, Princeton University Press.*
- 四津谷孝道
- 1986 「ツォンカパによる了義・未了義の設定」, 『印度学仏教学研究』, 第35巻, 第1号
- 2021 *Shākya mchog ldan's Mahāyāna Tenets System and the Three Wheels of the dharma, in Gateways to Tibetan Studies, A Collection of Essays in Honour of David P. Jackson on the Occasion of his 70th Birthday (ed. by Volker Caumanns, Jörg Heimbels, Kazuo Kano, and Alexander Schiller) vol. One, pp.1055-1079, INDIAN AND TIBETAN STUDIES 12.1, Department of Indian and Tibetan Studies, Universität Hamburg.*

〈キーワード〉 シャーキャチョクデン, 解深密経, 三法輪 (三転法輪), 了義, 未了義